

2024年度 第2四半期（中間期）決算説明会 近藤社長COO挨拶

富士電機の近藤でございます。本日は皆さん大変お忙しい中、富士電機の2024年度第2四半期決算説明会にご参加いただき、誠にありがとうございます。

既に皆様にご案内の通り、富士電機はこの2024年度から新たな中期経営計画をスタートしております。変化する時代に適応し、継続的に社会貢献を果たし、そのことを通して企業価値の向上を図ることを目指して進めております。

前中期経営計画最終年度の2023年度目標としておりました売上高1兆円、営業利益率8%以上がしっかり達成できたことを踏まえ、これからの3年間も改めて利益重視の経営を進めてまいりたいと考えております。

そんな中での上期決算です。後ほど荒井の方から丁寧にご説明いたしますが、ポイントを申し上げますと、利益重視という視点で言えば、営業利益の絶対額が上期として初めて400億円台に乗りました。

営業利益率8.1%は、上期として8%を初めて達成した数字になります。ビジネスの状況ですが、コンポーネント、特に低圧インバーター等のFAや器具の市況回復が非常に遅れているため、ここはマイナス要因となっております。また、EVの減速により、パワー半導体の物量が期待通りにはいっていないこともマイナス要因です。

しかし、一方で非常に好調なプラントシステムや食品流通がそれらを打ち消し、先ほど申し上げたような数字を達成し、全体として前年および7月の業績予想に対し、いずれも増収増益で締めることができました。中間期の純損益は355億円、純損益率にして7.1%となり、売上高、営業損益、経常損益、純損益のいずれも過去最高の数字を更新することができました。

これを踏まえた下期ですが、残念ながらコンポーネントの市況はまだ戻ってこないと置かざるを得ません。過去2年にわたる需要・供給バランスの崩れにより、流通在庫が蓄積してしまい、それが消化しきれないと分析しております。期初の段階では下期から緩やかに市況が回復するとしておりましたが、残念ながら4Qでの回復と、遅延を織り込まざるを得ないと考えております。

また、EV市場も短期的には戻るものではないと思いますが、中長期的に見れば車の電動化の流れは変わることはないと考えております。

そのため、研究開発や増産のための設備投資、こういった成長投資は適切なタイミングで、遅滞なく実行していきたいと考えており、将来の需要にしっかりと応えられる体制を整えたいと思っております。

また、上期好調だったプラントシステムについては、受注が引き続き好調に推移すると見込んでいますが、今期の売上に貢献するというよりは、次年度以降の注残が積み上がっていく状況になると読んでいます。

従って、今期についてはプロジェクトマネジメントをしっかり行い仕上げてまいります。並行して来年度以降の成長も見据え、リソースとプロジェクト体制を整えていくことで、更なる利益拡大に寄与する様に進めたいと考えております。

これを踏まえた年間業績予想ですが、売上高は7月に開示した数値からほぼ横ばいとしています。一方で営業利益は若干上振れする見込みで、年間営業利益率を10%台に乗せることを目指して進めてまいります。

コンポーネント市場にはまだ若干の不透明感が残りますので、ここをしっかりと見極めるとともに、実は第3クォーターに多くの改善施策を施していますので、あと2ヶ月これらの動向を見守りながら最後の着地を考えています。

話題が変わりますが、決算と同時に、工事事業者である富士古河E&C株式会社について、株式交換によって完全子会社化を進める方向であることを発表いたしました。

親子上場の解消や、プラントビジネスにおける工事の重要性が増す中で主にパワエレとのシナジー追求と利益の取り込みを目的としています。少し雑駁な内容になりましたが、私の挨拶とさせていただきます。引き続き変化に適応しながら、しっかりと利益追求を進めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上